

# 御文庫と御文庫講

## ● 御文庫講前史 ●

日本で商業出版が始まるのは江戸時代初期の京都からだと言われている。江戸時代以前にも経典や漢籍、歌集や物語などの出版は行われていたが、小規模な印刷物の制作にとどまっていた。17世紀中頃になると、公家、武士、町民、農民など多くの人々が本を求め始め、京都に続き、大坂でも商業出版が始まった。当初、出版業者の形態は今のように分業化されておらず、出版、印刷、卸、小売までやるところが多く、本屋、書林、書肆などと呼ばれた。

天和2年(1682)に井原西鶴の浮世草子『好色一代男』が大坂で出版され、大ベストセラーとなったことから浮世草子が次々に作られ、大坂の本屋は最初の繁栄を迎える。京都では仏典や経典、漢詩文や文芸物などが主に刊行されていたが、大坂では西鶴に少し遅れて登場した近松門左衛門の『曾根崎心中』などの浄瑠璃本が全国的なヒット作となり、一般大衆向けの本が続々と刊行された。

江戸時代中期に本屋の同業者組合として「大坂本屋仲間」が結成された。当時は海賊版の刊行が相次ぎ混乱が常態化していたので、本屋間で自主的に規則を作って監視することにしたのである。享保8年(1723)には幕府からも公認され、本屋仲間は明治5年(1872)まで存続した。

## ● 御文庫と御文庫講 ●

享保8年9月に大坂、京都、江戸の本屋仲間の有志により、住吉大社に「御文庫」と呼ばれる蔵の寄進が発願された。神社の文庫は、神社内で必要な文献等を保管するのが一

般的だが、住吉大社では版元から多くの書籍が奉納され、それを一般の人にも公開したので、御文庫は大坂最古の図書館とも呼ばれている。御文庫の建立後ほどなく、蔵の運営管理を担う「住吉御文庫講」が結成された。

享保15年(1730)には大阪天満宮にも「天満宮御文庫講」が結成され、境内の土蔵に多くの初摺り本が奉納されるようになった。天保8年(1837)の大塩平八郎の乱で文庫が焼失、多くの蔵書を失ったが、以前にまして版元や町民、学者からの奉納が相次ぎ、蔵書は徐々に充実していく。

以降明治期に至るまで、両宮の御文庫講は初摺り本の奉納、本屋仲間での参詣、奉納本の曝書、蔵書の点検修理、目録の作成作業などの作業を行ってきた。明治43年(1910)には両御文庫講が合併し「大阪書林御文庫講」と改称された。毎年5月には住吉大社、9月には大阪天満宮へ講員が参集、令和の現在も書籍の奉納、蔵書の曝書と点検を行っている。

また、天神祭には大阪書林御文庫講として陸渡御・船渡御の奉仕を実施している。御祭神である菅原道真公が旅先の行宮で読まれる御本をご用意させていただき、「<sup>ふぐるま</sup>文車」と呼ばれる館付きの車に積み、陸渡御に参加している。

なお、住吉大社では宝暦2年(1752)、文政8年(1825)に『御文庫書籍目録』を作成、昭和8年(1933)『住吉大社御文庫貴重図書目録』、平成15年(2003)に『住吉大社御文庫目録』が刊行された。大阪天満宮では、昭和45年(1970)に『大阪天満宮文庫連歌書目録』が、昭和52年(1977)に『大阪天満宮御文庫図書・漢籍分類目録』が刊行されている。